

どろや廻り

市村 真

いがぐり頭の生徒たちは真剣なまなごしをむける。

「今から九十年前、一粒の麦として、新島裏が京都の地に蒔いた同志社という種は、それから春風秋雨、九十年の星霜を経て、今日、西日本における最大の私学としてすくすくと育った。一粒の麦は地に落ちて、まさに多くの実りをもたらした。これが今日の同志社大学である……」

莊重なパイプオルガンの音と共にきこえてくる解説者の声。同志社大学の学園紹介映画は、こんなふうに始まる。

進学相談と学園紹介映画の上映を主な内容とし、「どろ廻り」という愛称で親しまれている事は、まあよく知ったもので、われわれ職場ではほとんど知らない者はいない。まず今年はその地方をどきどき廻るかを、入学試験志願者の分布等

で調査し、どこの高等学校出身者が何名いるかを綿密に調べ上げる。高等学校が設定されると、実際に現地へ飛び、訪問日時交渉にかかる。先方の都合に合わせて、訪問校Aから次の訪問校Bに移動する所要時間などを汽車の時刻表とにらめっこしながら、具体的な巡回スケジュールを組んでゆく。

九月もまだ残暑のきびしい頃、重い映画機を提げ、座長ほか二、三名の編成で二班ないし三班にわかれ、現地にちらばってゆく。必ずしも設営者が本番に出かけるわけではないので、タクシーの運転手に「〇〇校」といったつもりが「〇〇港」とまちがえられ、とんでもない所へ行ってしまったなどというエピソードもあるが、ともあれ、生徒の方は真剣だ。殊に今年は戦後のベビーブームの波が大

学におしよせ、しかも新旧課程の変り目の年とあっては、浪人してはならじと、神経は異状に高ぶっている。進学相談とは、何でも、同志社大学へ入るのに一番てっとり早い要領を教えてくださいものだ、と思い込んでいる生徒が多い。質問は矢つぎばやに「合格最低点は何点ですか?」「選択科目のうち、どの科目をとれば有利ですか?」などの質問はましな方で、「来年度の出題の傾向は?」と、そのヤマを教えろと執拗に問いただしてくるのには、さすがの座長もたじたじである。特に一番恐れられているのは「足切り」だ。ある科目の得点が低いために全科目ダメになるという制度だ。

私学と国公立とで顕著に異なる点の一つは、いうまでもなく授業料その他、学費の格差だが、父兄の関心は特にこの点に

集中する。

最近の生徒は現実的だ。前述の質問に先立って、まずたずねることは何かといえは、「〇〇学部を出たらどこへ就職できますか」である。それも、その質問内容はおよそ学問のことなどそっちのけで、就職先の資本金、従業員数と、まるで就職部のカウンセセルをやっているようだ。

この質問でもわかるように、生徒は既に〇〇大学〇〇学部というかなり進学先を煮つめた考え方をしていることがうかがわれる。

それでは高等学校での進学指導は、どのように行なわれているのだろうか。先年催した近畿地区の主だった高等学校の進学指導主任者の懇談会の席上、ある学校では「本人の希望、それにはば客観的と思われる合格難易のランキングのデータから、大学、さらにはその大学の〇〇学部といったところまで、かなりしぼった線で指導している」との意見が出されていた。同志社大学がどのあたりにランクされているかは興味のあるところだが、とにかく強力な指導によるものか、昭和

三十九年度の合格者の現役・浪人の比率は四対六であったのが、四十年代のそれは六対四と全く逆転している。更に四十一年度のそれはますます現役が強みを見せ、七対三となっている。

同志社大学の志願者は、そのうち約半

数近くを近畿以外の地方出身者で占めている。地方試験場を設けているせいもあるが、関西の大手私大ではこのような全国的な志願者の分布を示している大学は少ないのではなからうか。しかも地方の志願者の伸びは、近年ますますよくなってきた。近視眼的な見方をする、お叱りを受けるかもしれないが、更に地方の志願者の伸びのうち、ひときわ目だったのが、どき廻りをした地方である（「昭和三十八・四十年同志社大学入学試験関係資料」による）。

昭和三十八年度の入学試験志願者全員に対して、同志社大学を志願した動機、理由をアンケート形

式によって問うたが、十二項目にわたる動機、理由（予め考えられるものをこちらで用意し、該当の項目をチェックさせた）のうち「高校の先生の勧めで」というのが第二位をしめていた（因に第一位は「伝統があるから」であった。しか



ものうち統計上は出ていないが、全国に三千とちらばって教鞭をとっているわが校友、同窓の諸先生方の勧めは、いかに多かったことであろうか。

昨年は、わが学園も九十周年を迎え、全国各地で学園の紹介が盛大に行なわれ、ベビーブームとあいまって、今年度の大学志願者数は予想通り昨年度のそれより五十五パーセントと大きく伸び、志願者の数においては、いっしょに全国大学の第三位をしめることとなった。

過去何年かにわたって、北は北海道から南は九州鹿児島まで、とさって廻った「どさ廻り」という古風な広報活動も、それはそれなりの大きな効果を挙げてきた。しかし、これからの広報活動は如何にあるべきだろうか。

一昨年だったか、東京の主要私立大学を同僚と共に入試事務が如何に行なわれているかを調べて廻ったが、その際大学（または学園）には広報活動を専門職とする広報課なるものが存在することを知った。北海道で、私立大学の広報関係者の座談会（学生募集に関するものなの

で、出席者の多くは教務、教務事務関係者であったが）に出席したことがあったが、そこで「学園のPRは、その企画のほとんどを広告代理業者にまかせているが、やはり商品の広告ではないので、大学独自の広報企画が必要」だという話が出されていた。

これからの広報活動は現代にマッチした企画と新しい視野に立って強力に展開しなければならぬ。なぜなら、いつまでも手はなしで、当った志願者の予想に喜んではおられない時期が来るからだ。しかし大学の広報活動は、何もテレビのコマーシャルや、色つきの写真を受験雑誌に載せて見せるということだけでは無い。全国の高等学校の先生に同志社の現状を知っていただき、更には先生の中でも校友、同窓の諸兄と共に手をつないで、ベビーブームのすぎ去ったあとでも、優秀な生徒を絶やすことなくわが学園に送り込んでもらえるよう連携を強めることが、これからの広報活動の一つとなり得ると信じている。

（大学教務部職員）

本を傷つけず ノリ付も不要で 合本製本できる

「同志社時報」合本ファイル



お申込みは

京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社時報編集部

定価 100円 <送料50円>

色に出でけり

瀬古一光



世間では色というときよく色恋の方を指す場合があります。色に出でけりというテーマを指示されたのも多分に私が染色をやっているところから、百も承知の上で色彩学上の色と文学的な意味の色を混同させたのだと思います。色に出でけりは有名な百人一首の「忍ぶれど色に出でけりわが恋は物や思うと人の問うまで」から選ばれたことは明らかです。文学的才能のない者が書くことですから読みづらいことはお許し願うとしても、面白い話の種子も持ち合せておりませんので、テーマの色に出るという言葉を染色的に説明してみます。今日、染物屋さんでも「色を出す」という言葉をよく使います。これは指定された色にするために何色かの染料を配合して染

色することで、色合は長年の経験とカンが必要だったために、色を出すことは最も難しい仕事でした。今日では自記分光光度計があり、指定された色見本を反射率曲線に画いて、各染料の曲線からおおよその配合染料名を知り、染め上げた品物の反射率曲線が色見本のそれと一致すれば色は合うわけですが、今日でもなお色合は難事中の難事であることに違いはありません。

昔といってもごく近い昔までは南アフリカから船便で日本まで色見本が送られて来ていました。赤道を通り数ヶ月を要してはるばる運ばれて来た色見本に合せて染色された品物は、また船で数ヶ月かかってアフリカに着いた時、色が違うという理由でキャンセルされ

ることがしばしばありました。染料は光によって、また熱、ガス、汗その他によっても変退色します。アフリカから送られた色見本は日本に着いた頃には元とは大分違った色になっていますし、その変退色した色に合せて染めたものがさらに赤道をこえてアフリカに着いた頃には、元の色見本とは似ても似つかぬ色になっていても当然のことだったわけです。先に申しましたように先方から見本の反射率曲線を送ってもらえばこのようなことは無くなる訳で、今日では色が違うという理由でのキャンセルはほとんどありません。そして輸出の場合には、特に日光堅ろう度の高い染料で染められ織物検査所で規格に合格しなければ輸出できないようになっています。この規格でも特に米国向けには厳重で、バット染料またはこれと同等の堅ろう度を有する染料でなければ輸出できないことになっています。最も堅ろう度の低い塩基性染料がありますが、この染料は被覆力が大きい上になににでもよく染まるところから皆さんよく御存知の漬物の黄色の着色剤、グリーンピース、かまぼこの赤色、マッチ箱などに使われています。

私の前勤務地であつたお話を一つ。染色の大家のT教授と、今は亡きメリヤスの大家N教授との雑談のメモ。

T教授「Nさん、アメリカ向けに塩基性染料で染めた絹布が輸出されているの御存知ですか？」

N教授「知りませんなあ、しかし織物検査所が許可しないでしょう」

T教授「織物検査所でちゃんと許可を受けて輸出されているんですよ」

N教授「へえ！ アメリカで一体何に使うんです？」

T教授「それが何と棺桶の内張りに使うんですとさ」

この対話にあるように最近アメリカでは外側の色も黒一色だったものがいろいろの色彩のものが用いられたつとあると聞いています。

もう一つアメリカ向けに染料のお話。

先にも述べましたが輸出用の染料は日光堅ろう度を非常にやかましく言われます。まして赤道直下のアメリカの新興国向けにはよほど染料を厳選しないとすぐに退色してしまいます。そのアフリカ向けの先染めの目もさめるようなきれいな縞柄を業者が研究室に持つ

てきたことがあります。「水に入れて見て下さい」といわれて、端の一部を切つて水の中へ入れると染料が泣き出して青インキのようになりました。年配の方は御存知だと思ひますが、戦前の木綿の靴下は水に漬けただけで染料が泣き出しました。日本の主婦は靴下の色が落ちることをよく知っていましたから、必ず別に洗濯したものです。ある日本人がアメリカに行った時、靴下を洗濯屋に出して何も知らないアメリカの洗濯屋さんから、他の洗濯物を台なしにした弁償をさせられたと聞いていますが、戦前の靴下どころか泣き出す染料の量はそのまま染色に使えるほどなのです。こんなのがメイドインジャンパンの商標を付けて輸出されることに大きな不安を感じたのですが、これがなんと堂々と検査所をパスしている由、何が何だか判らなくなつて訳を聞いて見ますと。これが輸出された国では御婦人方の服になるのだそうですが、その国では一日に一回は必ずスコールがあるんだそうです。水にあえばすぐ浮き出す染物ですから、スコールをあげれば全身染料でよごされます。日本人だったらそのメーカーの品物は絶対買わないでしょうが、所変れば品變るの

たとえの通り、その国の御婦人方は、これを神のおめぐみだといつて最大のよろこびとしているのだそうです。何度スコールにあつても、いつまでも神のおめぐみのある織物が最高級という訳です。そのために日本の業者は、最高の日光堅ろう度をもっているバット染料で完全な染色をしてから、塩基性染料のような被覆力の大きな染料の濃厚溶液中に浸して上げけしそのまま乾燥して輸出するのだそうです。最も苦労するのは、付着している塩基性染料が一度のスコールで全部流れ出してしまふように糊で一部溶出を防止したりすることにあらんだそうです。

古来染め物は、何故色が出るのかその原因とか理論が判らぬまま、うまく発色するのも失敗するのも神まかせの状態にありました。だから染め物屋さんの仕事場には必ず愛染明王が祀られてあり、染物がうまく染まるように仕事の初めに必ず神様にお祈りしていました。もともと愛染明王は愛慾の神様いや正確には仏様ですから染物とは本来無関係の筈ですが、染物屋さんも愛染を藍染と語呂が同じところから、染物とくく藍染の仏様に選んだものと思われまふ。今日染色法の分類の中に

媒染染法があります。古来からの天然染料による染色法のほとんどがこの媒染染法によって色を出していた訳ですが、この媒染という字はドイツ語のバイン *beizen* をそのまま日本語にし、媒染という字をあてたところ美事にその作用と名が一致したものです。媒は媒灼人、媒介など仲をとりもつような意味に使われますが、媒染剤とは染料と繊維が仲が悪くて両者だけでは結合しない時に、その仲

をつまぐとりもって染色させるような薬剤を言うのですし、このような染法を媒染染法といっています。昔の御見合い結婚ですと媒灼人たる仲人さんが、全然見も知らぬ相手方をほめたたえて無理矢理? に結ばせたものですが、今の若い人は媒灼人は御両人が結婚式を挙げる時に初めて頼むようなケースが多く、媒を陪に変えて陪灼人の方がびったりするのはないかとさえ思われます。染物でも研究

(女子大学助教授・染色学)

が進んだ今日では、媒染剤なしに、染料の方か繊維の方かを改質して直接に染まるように工夫されています。今の若い人たちが自分が一番合った相手を自分で選ぶのも、やはり研究が進み、社会が進歩したためかも知れません。最後に色即色に落付いたところで拙い私の色談義も終わらせていただき度いと思えます。

明治三十六年(一九〇三)秋、デントンの在英の友人から、同志社女学校の基本金の一部にと、価二千円程の書籍・カード・

時計・石鹸・男女洋服及び附属品・菓子・毛織物・惣具等を寄贈して来た。

もっともその全部がそのまま寄付せられるのではなく、その売上高の三分の一が寄付せられるということであった。この品物の外に菓子果物を加えて、バザーが催された。同窓生達、女教師達各級生徒らそれぞれ部門を担当、来客は同志社教授、学生、校友、市内の各教会員等で、各部は大変な繁昌で、

女子部バザーの起源

お互が「我が校の栄の為に」と励まされ、見るも楽しいバザー風景であった。

女学校基本金同窓会募集を皮切りに、母校の諸建築、設備のためにと母校の必要に

対し同窓会は、本部ばかりでなく、各地支部の協力を得て、時間、労力、技術を捧げ母校の御用の為に、度々バザーを催して奉仕をして来た。

昭和二十八年(一九五三)以来、女子部各学校と協力して、女子部合同バザーが年中行事の一つとして行われる様になった。責任の自覚、奉仕、協力、努力の結果の喜びを知り、その収獲が女子大学、高校、中学、幼稚園、同窓会のために役立つ事を感謝している。

母校学に燃えている同窓生達は、この日を里帰りの日とし、恩師、旧友と楽しく語らいながら、奉仕、協力の出来る事を、こよない喜びとしている。

(同窓会発行「同志社創立九十周年記念誌」より)